

適期収穫と斑点米カメムシ対策で、収量・品質向上に努めましょう

《はじめに》

今年は幼穂形成期頃からの高温により、出穂期が平年より4日程度早くなっています。出穂期以降の登熟期間も高温条件で推移すると登熟が早く進み、刈り遅れると玄米の品質が低下します。

また、「令和7年度 病害虫発生予報 第4号(7月16日付)」では、斑点米カメムシの発生予想量が「多」と発表されました。今後、遅植えのほ場の出穂期に飛来する斑点米カメムシにも注意し、適期に防除しましょう。

高温時は刈り遅れによる品質低下に特に注意！

■高温条件では登熟が早く進むため、こまめにほ場を確認し、適期収穫に努めましょう。

■刈り遅れると茶米や胴割粒が発生し、品質低下につながります。

■落水は収穫の一週間前とし、収穫直前まで稲体に水分を供給して籾の充実を促します。



茶米(被害粒) 胴割粒(被害粒)

(農林水産省ホームページから)

■穂全体の籾が全て黄化した完熟籾になると刈り遅れです。出穂期から 刈取りまでの標準的な日数(表1)を目安とし、ほ場で収穫適期を確認しましょう。なお、収穫適期は「帯緑色籾歩合15%」と目安とします。

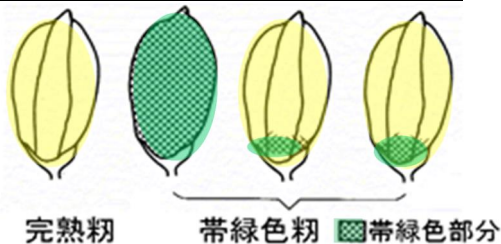


図1 帯緑色籾の見分け方

表1 出穂期から刈取りまでの標準的な日数

品種	出穂後日数
ふさおとめ	33日
ふさこがね	37日
コシヒカリ	38日
粒すけ	38日

注) 出穂期後が高温だと上記日数より3～5日程度早まります。

■水稻生育予測システム「でるた」は、出穂期を予測し、出穂期から収穫まで品種ごとの標準的な日数(表1)を加算するため、登熟期間の気温は加味していません。出穂期後に高温で推移した場合、実際の収穫適期は予測値より3～5日程度は早まるため、注意して下さい。



内が帯緑色籾

(平均的な株の長い穂を見る。穂の下部の枝梗に帯緑色籾が残っている状態が収穫適期。)

MENU
水稻生育予測システム「でるた™」
アメダス佐倉

品種を選択
コシヒカリ

移植日を選択
5/10 (土)

「コシヒカリ」5/10移植の生育予測
(7/15までの気象データより)
幼穂形成期 : 6/30
出穂期 : 7/25

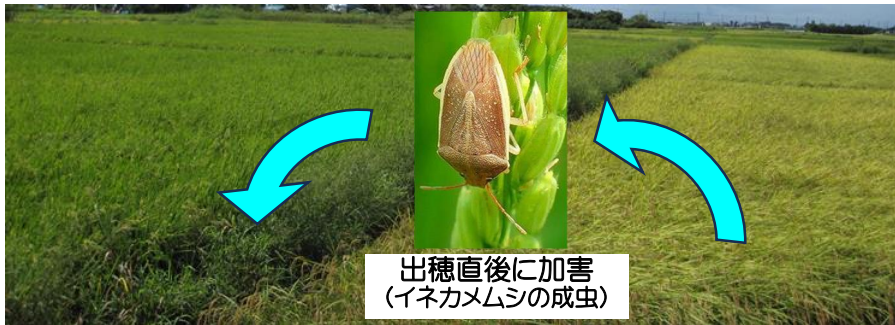
この予測から推奨される作業時期
追肥 : 7/7～7/15
斑点米カメムシ対策
畔草刈り : 7/11まで
防除1回目 : 7/28
防除2回目 : 8/9

収穫 : 9/1
※ 出穂期後の気温が高い場合、収穫適期は早まります

高温登熟障害危険期 : 7/25～8/8

「でるた」の予測画面

遅植えのほ場や飼料用イネ作付ほ場における斑点米カメムシ防除 －出穂期が遅いほ場への斑点米カメムシの集中に特に注意！－



■今年は、イネカメムシ、大型斑点米カメムシ類、カスミカメムシ類の発生予想量が「多」となっているため注意が必要です。

■今後、出穂期を迎える遅植えのほ場や、飼料用イネ（飼料用米、WCS用イネ）作付ほ場に集中することが懸念されます。

遅植えほ場の出穂期（表2）を目安に、斑点米カメムシを防除し品質向上に努めましょう。

■近年、発生が多いイネカメムシは出穂直後の稲に飛来し、加害・産卵し、ふ化した幼虫も加害するため、出穂期前の粒剤散布又は出穂期のフロアブル剤散布が効果的です。

さらに、他の斑点米カメムシ対策としては、穂揃期から乳熟期の追加防除も必要です。

■遅植えのほ場で斑点米カメムシを防除する際は、4月植えのほ場の収穫時期と重なる可能性があるため、隣接ほ場への飛散に注意して薬剤散布しましょう。

飼料用イネ（飼料用米、WCS用イネ）は、使用可能な薬剤を確認して防除しましょう。

表2 遅植えほ場の出穂期を目安（県中央部の場合）

品種/移植日	5月10日植	5月20日植	5月31日植
ふさこがね	7月17日	7月24日	7月30日
コシヒカリ	7月25日	8月 1日	8月 7日
粒すけ	7月25日	8月 1日	8月 7日
（飼）アキヒカリ	7月15日	7月22日	7月28日
（飼）夢あおば	7月23日	7月30日	8月 6日
（W）たちあやか	8月15～25日頃		
（W）リーフスター	8月21～31日頃		

注1) 水稻生育予測システム「でるた」による7月23日現在の予測値。

注2) WCS用イネ品種「たちあやか」、「リーフスター」は飼料用イネの栽培技術（改訂版、平成30年3月）を基に推定。



「令和7年度 病害虫発生予報 第4号（7月16日付）」は、こちらからご覧下さい。



イネカメムシに対する対策は、農林総合研究センターの第62回試験成果発表【作物部門】のYouTubeをご覧ください。（発表は、24分06秒から始まりま

早めの秋耕で稲わらのすき込みを

台風の大雨による稲わらの吹き寄せや、来年の移植後のガスわき（還元障害）を防ぐために、早めに秋耕を行い、稲わらをすき込みましょう。なお、ガスわき防止のために耕うんは深すぎず、15cm程度とします。

